EPA 看護師と協働するためのコミュニケーション実習
―対話を生み出す場づくりの試み―

Communication training for working with EPA (Economic Partnership Agreement) nurses
－An attempt to create a space that generates dialogue－

伊藤美保 [1]
Miho Ito
1 藤田医科大学
Fujita Health University

【はじめに】

本稿は、EPA 看護師の教育プログラム開発過程におけるコミュニケーション実習の実践を報告するものある。

1. 目的

コミュニケーション実習の目的は、共に働く人との対話を通して EPA 看護師・日本人看護師一人ひとりが課題解決の可能性に気づき、行動計画を立てることである。

2. 問題の所在と研究意義

EPA 看護師が国家試験に合格した後、日本語の継続学習、特に看護業務を遂行する日本語教育が十分保障されていないことが問題となっている。EPA 看護師は母国で実務経験を有しているが、合格後直ちに日本の社会文化を理解して看護業務に当たることは困難であり、EPA 看護師・日本人看護師双方から支援が求められている。

そこで，EPA 看護師受入れ病院の状況に適した教育プログラムの開発が必要と考え，EPA 教育担当者と共に実習案を作成した。EPA 看護師・日本人看護師双方の課題解決のために、自組織で継続して実施できる実習は今後の受け入れを継続するためにも意義ある試みと考える。

【方法】

1. 実習実施期間

2023 年 7 月 3 日(月)4 時間、8 月 1 日(火)3 時間

2. 実習参加者

・EPA ベトナム看護師(2023 年 3 月までの合格者) 7 名
・受入れ医療機関の EPA 教育担当看護師 1 名
・EPA 日本語教育・生活担当職員　　1 名（計 9 名）
・筆者:ファシリテーターとして進行と小講義を行った。

3. 実習の概要

［1 日目］　実習「メッセンジャーライン」
＜導入→ 伝言活動→ グループふりかえり＞
［2 日目］　実習「こころの窓」
＜導入→ 小講義→ 職場の課題の明確化→グループ共有 → 個人目標設定→ 行動計画→ 全体ふりかえり＞
実習はラボラトリー方式の「**体験学習の循環過程**」《 **体験**［実践］⇒ **意識化**［内省］⇒ **分析**［解釈］⇒ **仮説化**［応用］》に沿って設計されている。

4. 倫理的配慮

藤田医科大学医学研究倫理審査委員会の承認を得て実施した(受付番号 HM22-575)。目的、研究協力は任意であること、匿名性の保持等について説明し同意を得ている。

【結果】

EPA 看護師と日本人看護師・職員が日常のコミュニケーションに感じる状況を語り、共感し合う対話が生み出されていた。全体ふりかえりで個人の思いや行動目標を伝え合い、主体的に課題解決を目指す行動計画を共有し、ファシリテーターからもフィードバックを伝えた。小講義資料(図 1)と問いかけ・記述内容(抜粋)を示す。

グラバア俊子・小山田奈央(2008)実習「心の四つの窓」南山大学人間関係研究センター紀要「人間関係研究」第 7 号 p. 172「対人関係における自己成長のモデル」を参考に作成

図 1「こころの窓」 小講義

記述内容(抜粋)　EPA 看護師：[➢]　日本人看護師・職員：[◎]

[1 の窓] 職場のコミュニケーションはどんな様子ですか？
➢ Dr に話す時、むずかし　ことば．．．
➢ 日本人と勉強会さんかするとき 一人しか外国人なので 内容わかりづらい
➢ 患者のかぞく はなすとき 自信もっていないので ナースセンターの電話まだ返事できない。
◎ 伝えたと思ったことが伝わっていなかった。
◎ 連絡がこない、遅い

[3 の窓] 1 の話し合いのとき、どんな気持ちでしたか？
➢ こまってることをえんりょうなく話してリラックスになる　➢ 安心で話せて楽になっている
◎ 相手をよく理解できた。共感できた。
◎ どうすれば伝わるか考えた（スピード）

[4 の窓] これから試みたいことや頑張りたいことは？
➢ 電話で自信をもって返事したい
➢ かんじゃさんとかいわのなかでよく けいちょうし、ひつようがあれば、Dr、しゃかいしえんしゃにじょうほうていきょうし かいにゅうできるようにがんばりたい。
➢ わからないことば(えんりょうなくで)もう 1 回確認してたくさんことばとぶんぽうをおぼえるようにしたい。
◎ 相手の理解を確認する。話しやすい雰囲気づくり。
◎ EPA のコミュニケーション能力 up の評価周知方法

【まとめ】

参加者は対話を通して「開放」の窓を広げ、目標を明確にし、主体的な自己の行動計画を立てることができた。本実践は EPA 看護師と協働するための本質的な課題解決のあり方を示したと言えよう。今後は実習の内容や日程の組み方を状況に合わせてプログラム開発を進めて行く。

参考文献

津村俊充.(2019).改訂新版プロセス・エデュケーション 学びを支援するファシリテーションの理論と実際. 金子書房.

本実践は JSPS 科研費 22K10667 の助成を受けたものです。